

厚生労働科学研究費補助金（難治性疾患等政策研究事業（難治性疾患政策研究事業））  
神経変性疾患領域の基盤的調査研究班（総括・分担）研究報告書

進行性核上性麻痺に対する短期集中リハビリテーション効果の検討

研究分担者 古和 久典 （独）国立病院機構松江医療センター副院長

研究要旨

進行性核上性麻痺（PSP）に対して短期集中リハビリテーションによる改善効果，反復実施の有用性が示唆された。

古和 久典 （独）国立病院機構松江医療センター副院長

A. 研究目的

進行性核上性麻痺（PSP）に対して，リハビリテーションの有用性に関する十分な検討はなされていない．LSVT® BIGは，動作の大きさに焦点を当てたプログラムで，パーキンソン病においてその有用性が報告されている．今回，PSPに対して同様のプログラムによる短期集中リハビリテーションを行ったので報告する．

B. 研究方法

対象は，MDS-PSP criteria（2017年）に基づいて臨床診断したPSP症例で，2018年4月以降に当科入院にてプログラムを実施した11例のうち，運動機能評価を前後ともにおこなった8例（男女4例ずつ，平均73.6歳，平均入院期間28.0日）である．運動機能評価は，Berg Balance Scale (BBS)，10m歩行時間，10m歩行歩数，Timed Up & Go Test (TUG) の4項目で，各項目について入院時と退院時で比較検討した．

計4回のプログラムをおこなった4例（男2例，女2例ずつ，平均75.0歳，平均入院期間22.5日）において，反復効果の検討を行った．

（倫理面への配慮）

本研究は通常診療の中で実施した評価をまとめたものであり，該当しない．

C. 研究結果

初回入院時における平均BBS（入院時，退院時；以下同様）は39.8，46.4，平均10m歩行時間は10.5秒，9.1秒，平均10m歩行歩数は20.4歩，17.8歩，平均TUG 12.0秒，10.9秒で，BBS，歩行時間で統計学的に（ $P < 0.05$ ）有意な改善が認められた．計4回の各入退院時においても，同様の傾向が認められた．

D. 考察

リハビリテーションの内容や反復実施の間隔，評価方法の検討を踏まえて，さらなる症例の蓄積が必要である．

E. 結論

PSPに対して短期集中リハビリテーションによる改善効果，反復実施の有用性が示唆された．

G. 研究発表

1. 論文発表 なし
2. 学会発表
  - ・古和久典，進行性核上性麻痺に対する短期集中リハビリテーション効果の検討．（第39回日本神経治療学会学術集会，津，2021年10月28日）

H. 知的財産権の出願・登録状況  
（予定を含む。）

1. 特許取得 なし
2. 実用新案登録 なし
3. その他 なし